

十一月
五號



火の用心

火事の季節となりました。

お互ひに火の元に注意致しませう。



油断大敵



ウインドウクワイ
——ジン——

ワタクシハハヤクオスキニナレバ
 ジイトオモツテルテルバウズヲ
 シテヒデコサントヒサコサント
 マコエデウツテアソソク
 ンタ。ウインドウクワイニトツテ
 毛ヨイオスキニナリマシタ。
 ワタクシハハヤクオスキニナデ
 ジハンヲタベテカラズイソギデガ
 ヲカウヘイキマシタ。ハタガキレ
 イニヒラヒラシテヨウイガデキテ

キマシタ。

カネガオツテカララデオタイサ
 ウラシテカケツコヤフウセンギ
 ヤウソウヤバウヒキヤタイコタ
 タキヲシマシタ。カケツコハ
 バンアトニナリマシタ。フウセ
 ンキヤウソウモ一バンアトニナ
 リマシタ。ワタクシハクマシカ
 ヲタデス。
 イウギヤコクバンニエヲカクノ
 ヤイロイロナモノガオモシロカ
 ヲタデス。ユフガタニナリマシ

ソナヒキラシテグルグルマハ
マシタ。モウオヒルニナリマシ
オオランデ、イウシヤウキヲア
タ。センシユノ人がマタカケマ
カガモラヒマシタ。(糸松洋子)

コナヒタウンドウクワイダツタ
デワタクシモカケマシタ。ワタク
ハ一トウニナリマシタ。フウセ
シヤウソウハビリニナリマシタ
ヒキラシマシタ。アカガイウシ
ヤウキヲモラヒマシタ。
(西村善美子)

カラサガシノトキリヨウコチヤ
ンガママゴトヲヒロヒマシタ。セ
イコチヤンハミカンヲニツヒロヒ
ボクハ、ウンドウクワイノトキハヤク
トケイヲミテセシ四十フンニキマ
シタ。カウチヤウセンセイカラ、オハナ
シヲキキマシタ。

「ゲンキデシンナシテグサイ。」
トオツシヤイマシタ。スグハツマリマシタ。
カケツコラシマシタ。「ウケンイデカ
チモマケキ」ゴアトナリマシタ。(科木野)



ニねん
つゞりかた

●うんどうくわいの朝

てらだくに子

朝おきて見ると、空がなんだかくもてぬました。私はしんばい
ようがありませんでした。すると、となりのおぢさんが、「きつ、おてん
まになるでせう」といひました。私はうれしくて、たまりません。
大いそぎでごはんをたべて着物をきて、とけいを見ぬと、もうじき
七時四十ふんになりさうでした。私は大いそぎでしたくをして、外
へ出ました。そしてまたそらを見ぬと、そらは青ぞらでした。

●かけっこ

あさぬまかず子

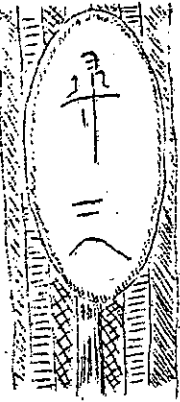
一年生のかけっこがすむと、私たちのかけこになりました。私たち五
人は出発線にならびました。すると、「ようい」と先生のこゑ。どん

聞くが早いのか、かけだしました。私は前の子をぬかうとしましたら前の子が、「ぬかれるものか」と思ったでせう、見てるまに、その子が、ぱりきをだしましたので、私はぬけませんでした。私は決勝線まで走りました。とう／＼がりなのでくやくしてたまりませんでした。

●よるのできごと

横山 芳文

私がおぼんをたべていたら、おれあさんが「ふたえさの中に何か光っているから行ってごらん」と、おしやうたから、ぼくとあきちゃんで行ってみしました。ぼくはこはいのであきちゃんに「あけれ」とい、ましたら、あけました。ほしのやうにたくさん光っておました。おつまでも見ておました。そして、おとうさんに「あの光るのぼなんですか」ときいたら、「あのさかなのほねの中にあるりんといふものが光るのだ」とおしへてくれました。



私のくせ

其一 大沼榮一

ぼくには、エンピツをなめるくせがあります。まい日／＼字をかきまにきつとなめます。エンピツをなめては毒になります。又字がきたなくなりますが、どうしてなまほさなければなりません？

其二

浅沼庫雄

僕のかせは学校からかへると、すぐかげんをすつぽらかりて、おそいト行くことです。だからいつもお父さんやお母さんにしかられます。おはやくなほさなければなりません。

其三

服部きぬ子

私はうちの人がなにか買ってきておくれといはれると、すぐにいふくせがありま、わるいとしつておいてもなかく／＼なほらないでこ

まります。

其四

壬生恒子

私のくせはごは人の時おかげのすまきらひがあります、だからそんな時はいつもお母さんからしかられて、おこうこうを出していただく、さすがにこればかりだと思ひます。

其五

石田多美

私はごは人の中にチヨットのごみがあるで、それを、おせ人の上におく、くせがあります、よその家へ行つた時、こ人なくせがあると、こまりますから早くをほしたいとおもひます。

今では

水留邦枝

私共の所大村には去年までは、でんとうがなく、ランプであつたが、今では、でんとうがついて大へんべんりになつた。



菊池照子

私は運動会の朝、おきてにはへでると雨がしよぼ、ふつておた。私はまたあめで運動会が起きないかと思つてえんだいにすはつて、それをながめてみると、東の方がだん、あかるくなつてお日様がでて来たので、私はうれしくて、とびあがりました。それからうちに歸つて、ひさちやんをちよつとだつこして、それから學校へいきました。

釜谷秀水

運動会の前への晩にお父さんが、天気を見て、ごらんといつたから、おもてに出て見ると、黒い雲が空いちめんあつて、星もお月様もなかつた。

だけ北どちよつとわからなかつたから「わからないうよ」といふとお
かつての方でお母さんが「雨らしい」といつたから家へはいつた。
あくる朝になつて目がさめると今日は運動会だといふことに気がつ
いてとびおきてえんがはへしやがんで空を見ると青空もあつた。え
していつもの用をしてごはんを食べる前にふくをきるとすしさむ
かつたからほそいすぢのはいつた上ぎをきてはだしでえんがはか
らとび下りてかけて門を出るとしげなほさんがおたのめでいつしよな
いつた。

池田 光

私たちの運動会は十月二十日でした。私はここの運動会に始めて二等を
とりました。私は何よりもうれしかつた。しいちやんとマテコがはうびを
あけてべこらんといつたけれども私はうれしくあけられませんでした。さうすると又しいちや
んがはやく見せれといつたので、あけてみたら、バンドがはいつておました。私は
うちの人があないかとさかしたら、おとうさんがおたから、おとうさんに二等
をとつたといつたら、おとうさんがニコくしながうちへかへつていきま
した。

尋五綴方

私の家

林 久子

私の家は東町にありお母、家、お母、お父さんと
お母さんと私と三人です。家はせまいです
けれどもお母さんがくろくでにぎやかです。
家のお母は千代ちゃんの家なうで唱歌を歌ふ
聲がよく聞こえます。家には目白三羽と小間
鳥三羽がいておます。目白三羽はこちらの目
白で一羽は木曾の目白ださうです。その中一
羽は子なりで来るくろくでいます。遊び相手
がなくならし止り木や産などをもちやけてお
ます。家中心一番たかしみなのは夕飯の時
二日中の面白かつた事を話し合ふことです。

私は海の水です

笹口新胡

私は海の水です。からだが塩辛く四角い箱に
入れば四角になります。或日の事は私はどう
かしてあの高い壁へ行つて見たいと思ひました。

毎日おにぶつかつてとびあがつて居ました。

けれどもお母さんがあがれませぬ。その中につか
れてしまつたので日なたぼつこをしながらお
しまひました。目をあけて見ると私は高い空に
上つておたのびです。どうして知らぬまに上
りかと思つて見ると私は水蒸気となつて空
つておたのびでした。

雨の夜

藤 藤 淡子

私が勉強してゐるとポツ／＼と雨が降つて
来ました。文雨の夜と思ひながら算盤を
おました。その中に「と音がしたか」と
思ひました。えんがはのしやうじにふりかけて来
ました。お母さんが「私にふりかけて来
行きました。私は安心して勉強をつづけました。
雨かひどいぢを夜を過ぎる人の足音をきかせん
家の中はしー／＼としてとてお静かです。

私は一人でこゝろを言ひました。こゝろを静

かた夜勉強すると一番よくおほえられてい

と思ひながら高勉強をつづけました。
気が落ち付いてゐるせいがいづれよりよくあ

呼えられた。雨の夜は勉強するのに一番よいと思ひました。

非常時小笠原島 真山宣夫

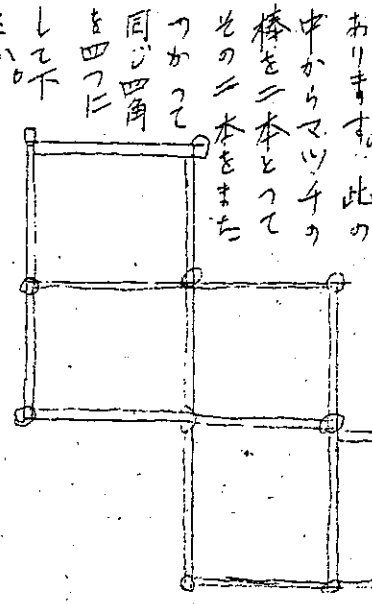
今の日本は非常時である。その時にみんながボンヤリしてゐたなら日本はどんなことになるでせう。此の前の防護團の演習の時をやつた様に此の大村は大村の人がみんな心を一つにしてしつかりやらなければならぬ。さうすればどんな大敵でも防ぐことが出来ます。然し心が一つになつておなれば少い敵にも負けません。心を合はれ心を一つにして一生懸命此の小笠原島を擁護させよう。

一匹の蟻 石井愛子

私が窓を空をながめたりパンを食べてゐたり足の上がなんだかまじくするのを何んだと思つて見たら一匹の蟻が居た。物はつかんでしるゐるにつかみおろした。せしたら落ちてゐたパンを見つけて粉の一部分を拾つて穴の中に入れて行きました。するとまた穴の中から一匹の蟻が出て来た。つづいてまたも出て来た。

その蟻はめい／＼落ちてゐる粉をひつて行きました。蟻が穴の中へ入つて行くのを見てつくつく思ひました。全く蟻といふものは働き者だと思ひ私も蟻の様に働けばお母さんも大助りでせう。お母さんもまた時々は前のために働かなくてはなりません。さう言はれるのが面白いです。

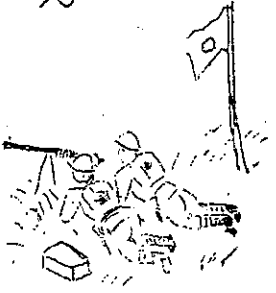
此處に同じ四角が五つ



◎ さあ、さあ、どこですか。

尋六

綴の方



○ 防護團の演習 黒川三義

十一月三日の事である。校長先生が「午後から防護團の演習をするから青年團がむかへに来るまでは家に居なさい」といつた。僕は學校からかへるとすぐ家の人に話した。午後一時四十分頃僕は演習を見るため家を出た。途中光夫君とあつて、共に大神宮山へのぼつた。そこにはもう大勢の人が見て居た。やぐらの上の消防夫があひづの鐘を打つた。沖の方からは七そらのふねのつて、扇浦の人がせめて来た。青年團が表のとほりを通つて、海岸の方にかけて行つた。その時はもう町々に煙まく毒がまかれて、家が見えなくなりそうになつた。小銃の音大砲の音が一度にひびき渡つた。火事が二三箇所起つて、消防夫

がとんで来てそれを消すやら、けが人をかゝいで行くやら、まるで本物見たいであつた。演習は半時間ぐらひでをはつた。

○ 運動會 小祝セキ

十一月二十一日は私達の楽しい運動會でした。私は色々した中で一番面白かつたのは親子リレーでした。試験場の人がかける時子供にまて／＼といひながらかけて行きました。又わごところんだりしたので私は面白くありませんでした。一番うれしかつたのは私達の優勝旗をもらう時と綱引でした。私は綱引でお尻を泥だらけにしてかへりました。

○ 徒競走 藤原好子

「やだ／＼」と云つて居た私だつた。先生に出なさいと云はれて萬事休すし／＼と徒競走の列にはいつた。「ドン」となつたと思ふと皆はもう走つて居た。私はずつと出おくれしてしまつた。おうえんする叫び声もうつ。

その次ぎ高ニは運動場の中央で、出発の合図で走り出した。清瀬まで行きたまは、おそかったが、かえりとうんとぬいたが、等には入らなかつた。学校に来てたら、六年の金川が一等だった。そして優勝旗は金川に渡された。

運動會

小宮山

さだ子

十一月二十一日は運動會でした。その前の日など雨が降つておたが、私達のまかたえてくれたのでせう。いいあんばいに、雨も降らずに通りました。ほんとはよく運動會が出来たのを何より喜ばしいことと思ひます。私達高一女のは、ダンス一ツ、二千五百九十六年といふのが一つ、家庭競走、それから徒競走があります。其の内で一番面白かつたのは、家庭競走でした。私は、本年の運動會で一番面白かつたのは、番外親子競争でした。まだいろいろありましたが、二年生のダンスも可愛かつた。終りになつてからは、綱引をして、それから太平洋の歌をうた。運動場を回り、おはつて、赤、白の勝負をきめたら、赤が二点勝つたので、讀賣新聞社寄贈の優勝旗は、赤がとりました。

高等科第二學年綴方

夜の淋しさ

屋代礼遊

海岸から吹き来る風、夜道を通る人影、何と淋しいものだらう。風に吹かれて木の葉が散る時月に照らされて青白く見える、海岸に立つて沖の方を見てみると、唯銀色の波の音ばかり聞える、波を遡つて来る海風も身にしみ頃となつた、木の葉がカサカサと音をたてるの、夜の淋しさを感ずる、静かな暗の中に燈の影も淡く何か物思ひにふけてゐるかの如くに見える。

運動會の朝

赤井三部

僕は明日の運動會をもちこがれながら床に入った、空朝目がさめるととび起きて外に出て見た。雪が一面に空をおふてゐた、何時までも空を見つめてゐると雨がシヨボシヨボと降り出した。軒下に入つてまだ空をながめてゐるとだん／＼明るくなつて来た。ア、もう夜が明けて来た。とつぶやきながら又床に入った。弟の聲をきいて目をこますともう辺りはすっかり明るくなつてゐた、外に出て見ると前よりも寒気がよかつた、風が水を汲みに井戸へ行つて顔を洗ひ水をかついで、朝飯をすまして運動會の用意をして學校へいそいだ。萬國旗が迎へる如く風にひるがへつてゐた。

はがラリと精進していった。何時も寝坊の私も今朝は妹の「まっちゃん」の一聲で眼がさめた。又故郷を見つめて笑つてゐた。明行にはまだ曇つてゐた空は次第に晴れてゆくのですつかり嬉しくなつてしまつた。学校に行く仕度をしてゐるともう教鈴がなつたので急いで学校へ行くと皆々如何にも嬉しそうに白と赤の顔をうしろな。校庭へと見ると万国旗で飾られておんだが庭で展覧會でもするやいな気がした。門は毎年のやうに紅白の布でつつまれ青系紗のこころもきれいに(後略)

一年小祝マス

待ちに待った運動會一年一度のこの

い運動會、今年は何時かの年より少しといふことであつた。たのしみだ。毎日、降る日も照る日も定まらない天候で皆心配してゐた。その心が神に届いてか當日一日だけ雲一片なく晴れて渡つて万国旗が風にたびいて運動會はよいお天気でした。見物人は黒山のやうにつめかけて競技はだんく進められ紅組白組何れも全力をこめて勝つた。けれどもどちらか負けなければなりぬ得莫は或は因兵にたつたり追いつ追はれつ最後にとつて紅組の勝となつた。そして新賞新開社等贈の優勝旗は紅組に降りました。後畧 年内海媛子

運動會を詠ず

H生

○ 獲備の日

紅白のぬのもまかたが骨がみのさびしく立てり雨の前日

○ 企

走る毎いつも最後は我なりき心は浮ぶ幼き思ひ出

○ 運動會の朝

さし出づる朝日と共に晴々し登校を急ぐ生徒等の顔

○ 尋一の徒競走

負けまじとかたく結ぶる口元もいとあどけなし尋一の女生

○ 日の丸萬歳

日の丸の旗を打ふり陽の下に日本の女兒の意気はあがり

○ 徒競走

ころびてもいためる足をふみしめてなほ走り行く子等のけなげさ

○ 親心

首をまげふでをふりつ、我が子等の勝負如何にと見守る親達

○ 面校選手リレー

わき登る拍手の最中スタートにつける選手の決意の眉毛

○ 空拾ひ

よちくと囀にもにたり幼な児の空拾ひに群れる姿は

○ 苦心

心配のあまりねらわれぬ事ありし運動會の最初の前後

○ 攻城

若人が肉弾相うつ攻城に非常時日本の血は躍りけり

○ 村祭り

大太鼓たき終ればにこくと笑ひ顔にてもどる子供等

○ 櫻の精

少女等のダンスを見ればそよ風になびく若葉の光をぞ思ふ

○ 協議費完納競走

協議費を納めぬ人も半ばあり來賓レースもむづかしきかな

○ 対抗リレー

老ひたるも若きも共に叫びたり対抗リレー決勝の際

○ 親子リレー

子に負けし親は小首を傾げつ、始めて知れりわが身老ゆると

○ 最後

むらぎものは揚る夕闇に高くひびける万歳の声

御寄贈

一金五糸也

石井武山氏よりなでしこへ

一金五糸也

笠口桂太郎氏より七息女岩子香奠

返礼に替へ保護者会基本金へ

右誌上を以て厚く謝礼申上げます

學校日誌より

十月十五日、扇浦校運動會見學に行きました。

全十七日、本校の運動會總練習を行ひました。

全廿一日、好天氣に恵まれて盛大なる運動會を催し

ました。

昭和九年十月第百五拾五號
大村尋常尋常小學校十デシニ編輯部

